

経済学分野における知見を基礎とした「地域教材」の活用

The Applications of “Teaching Materials about Local Communities”

Based on a Store of knowledge in Economics

荒井 眞一 平岡 祥孝 加藤 裕明

ARAI Shin-ichi HIRAOKA Yoshiyuki KATO Hiroaki

The purpose of this paper is to make teaching materials under the outline in “Critique of Political Economy”, and to study about local communities deeper. The students studying the teaching process made teaching materials about potatoes in Tokachi area in Hokkaido, and conducted a class for the students of high school in Sapporo city.

1. 再現可能性を企図した地域社会を把握するための理論的枠組み

地域創生が叫ばれる昨今、地域社会に貢献する人材の基盤づくりを担う地方大学とりわけ地域密着型大学の役割は高まりつつある。「地方の大学には、将来の地方活性化に資する人材育成への貢献が期待されており、これを意識した独自性ある教育が望まれる」ことは、時代の潮流とも言えよう¹⁾。

それゆえ、中学校・高等学校段階の学びにおいても、地域社会に興味・関心を持たせることが教員としての役割の一つである。特に社会科において地域経済を理解させていくためには、産業の発展経過や構造などの地域特性に対応した教材開発が重要と考える。教職課程においては、理論経済学、経済地理、地域経済論等の知見を基盤とした「地域教材」を創意工夫するための学びが求められよう。

上記問題意識を踏まえた本稿の目的は、学問研究成果に基づいた理論的な枠組みの下で、大学の教職課程における学生の自主的な学びを組織し、学生による認識形成の筋道を客観化することにある。

2017年7月に文部科学省より出された学習指導要領においては「主体的な学び」の実現の重要性が指摘されている²⁾。このような考えは、同省より1989年に出された思考力や問題解決能力を重視する「新学力観」や、2011年以降実施の学習指導要領で強調された「生きる力」、2012年の中央教育審議会答申においてしめされた「アクティブ・ラーニング」などに通ずるものと思われる³⁾。

表1 教職履修学生による公開授業一覧(「O.C.」はオープンキャンパス)

年度	テーマ	舞台
2012	「カントリー・サインから読みとく北海道」	O.C.
	「貿易を通してTPPを学ぶ」	O.C.
	「タイムスリップ・イン・バブル」	O.C.
	「北海道の経済について考える ～余市とニシンから～」	O.C.
2013	「ジンギスカンと北海道」	O.C.
	「道の駅紀行 -道の駅から学ぶ地域性と特色-」	出前
	「札幌ラーメン不思議発見」	O.C.
2014	「製糖業から見る十勝」	O.C.
	「ものづくりのマチ室蘭 ～白鳥大橋～」	出前
2015	「十勝の生産物から経済学を考える」	出前

すでに先稿において荒井は、古典経済学の枠組みに依拠する形で十勝地域における農業のありようについて乳業に焦点を当てて、学生に授業づくりを行わせた⁴⁾。札幌大谷大学地域社会学科では、2012年度におけ

る学科新設以来、教員免許状取得を希望する学生に自主的な学びの場を提供するべく、時間割に組み込む形で「教職自主ゼミナール」を開設している。ゼミにおいてはオープンキャンパスや出前授業といった学外の方と交わる場において、学生たちにたいして公開授業の舞台が提供されている。2012年度以降に行われた公開授業を表にまとめれば上記表1のようになる⁵⁾。

すべての実践に共通な点を挙げるならば、地域性を反映した課題設定がいずれも、経済的な内容を基礎としていることである。学科が設立されてから5年を経過するが、この点に変化は見られないようである。

2015年度に行った「十勝の生産物から経済学を考える」実践においては、教員による指導の下、マルクスの『経済学批判』における記述を踏まえて、乳業にかかわる生産・流通・消費を統一的に把握することを考察させた。

2015年度と同様に、2016年度に授業づくりを行った学生たちも十勝における農業を取り上げたいとの意思を表明していた。このような経緯を踏まえ、2016年度実践においては、十勝地域における馬鈴薯生産という視点から、農業生産にかかわる生産・流通・消費を統一的に把握することを考察させた。この考察のため、学生たちに対しては、2015年度と同様に、古典経済学のエッセンスともいえるマルクスの『経済学批判』から（筆者が吟味した）要点部分を材料として理論的な枠組み作りを試みさせた。以下、本論においては『経済学批判』の考察から学生が設定した理論的な枠組みに沿う形で、現地調査を踏まえた実例を示しつつ完成された実践のありようについて明らかにする。

今回の授業実践に関しては、札幌市内の公立高校のご協力の下、本学への大学見学の場をお借りして授業実践を行わせていただいた。

2. 経済学の知見を基礎とした「地域教材」の教育内容

2016年9月2日に行われた大学見学に参加した高校生らを対象とした模擬授業に向けての話し合いの中で、学生らは、2015年度に続き帯広を中心とした十勝地域における農業の展開について具体的に学びたいとの意向を示していた。十勝地域における農業は多岐にわたるが、2016年度の参加学生らは馬鈴薯生産に焦点を絞りたいとの意向を示した。その折幸運にも恵まれ帯広市内にあるカルビーポテトの工場を見学させていただけることとなったので、学生らの意向を具体化してもらうこととした。

十勝地域では畑作を中心とした農業が幅広く行われており、馬鈴薯の生産が全国有数であることはあまり目立ってはいない。しかしながら、十勝地域における馬鈴薯の生産量は全国の3割にも及び、上に述べたカルビーのような大企業の生産の拠点ともなっている。また、富良野市内には、帯広で生産された馬鈴薯をメニューの中心としたレストランが、カルビーによって営まれている。それゆえ、馬鈴薯の生産から消費までを一貫したものとしてとらえ理論的な内容として大学見学に参加していただく高校生らに提示することが可能ではないかとの見通しが立った。

上のような見通しをより確かなものにするため、マルクスによる『経済学批判』の記述に基づいた理論的な枠組みについて考察を行わせた。昨年度も依拠した生産一般に関する記述を引用すれば以下のようなものとなる⁶⁾。

生産一般は1つの抽象ではあるが、しかし、それが共通なものを現実に明瞭にし、固定し、したがってわれわれのために反復の労をばういてくれるかぎりでは、1つの合理的な抽象である。

上の記述に従うならば、生産一般をとらえることによって社会における経済的な動きを合理的かつ抽象的にとらえることが可能となる。さら

に『経済学批判』では、「合理的な抽象」とされた生産と流通及び消費との関係について、「流通は、それ自身、ただ交換の一定の契機でしかない」との記述とともに⁷⁾、「生産は一般性であり、分配と交換は特殊性であり、消費は個別性であって、その中で全体が連結されている」と述べられている⁸⁾。昨年度と同様にこれらの記述に従うならば、一般性を有する馬鈴薯生産を起点として、十勝地域における特殊性を背景とした流通のありようや、個別的かつ多様な消費のありようが連結されたものとして導き出されるはずである。

『経済学批判』においてはさらに、生産、流通（分配、交換）、消費の関係について「生産、分配、交換、消費が同じだということではなくて、それらはすべて1つの総体の構成部分をなしており、1つの統一体のなかでの区別をなしているということである」との記述がなされている⁹⁾。この記述に従うならば、馬鈴薯の生産、流通（分配、交換）、消費にかかわる内容を整理することにより、前年度と同様に十勝地域における経済の展開の具体例を「1つの統一体」として述べるのが可能となるだろう。

3. 経済学の知見を基礎とした「地域教材」による授業実践

以下、自主ゼミ学生により作成された「十勝の馬鈴薯と日本の農業」における授業進行スライドを紹介しつつ、『経済学批判』記述より導かれた理論的な枠組みについて述べる。

授業においてはまず、「十勝の馬鈴薯と日本の農業」との授業名がしめされた後に、十勝地域においては農業が盛んであることが予備知識としてしめされた。



十勝の農業は熱い

十勝は生産量日本一位の作物がたくさんある。

- ・ビート(天才)の生産量 シェアほぼ100%
- ・小麦の生産量
- ・大豆の生産量
- ・小豆の生産量
- ・いんげんの生産量
- ・青房トウモロコシの生産量(デントコーン)
- ・長いも生産量
- ・スイートコーン生産量
- ・ごぼう生産量
- ・チーズの生産量
- ・肉用牛産出額
- ・牛乳処理額
- ・馬鈴薯生産量

カロリーベースの食料自給率は1100%に達する。

人口35万人の地域で約400万人分の食料を生産している

なぜ十勝は農業が盛んなのか？

- ・十勝平野という広い土地(北海道の10%)
- ・平野の中に十勝川が流れている
- ・寒暖の差が激しい
- ・土地が火山灰を多く含んでいるため作物に適している
- ・しっかりとした技術伝達

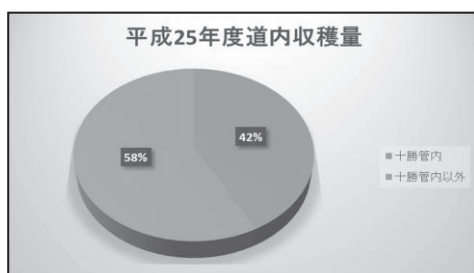
図1 学生作成授業「十勝の馬鈴薯と日本の農業」における授業進行スライド 02, 04, 05, 06

授業では、農業が盛んであることの後に、十勝地域では馬鈴薯の収穫量が大きいことが、以下のスライドにより引き続きしめされた。



平成25年度 馬鈴薯の収穫量

- ジャガイモの収穫量
- 日本全体では2,364,000トン。
- 日本一は北海道で、1,880,000トン。
- 全国の8割を占める。
- 2位は長崎県で82,900トン3位は鹿児島県で78,100tと続きます。



十勝で全国の約34%生産しています


図2 「十勝の馬鈴薯と日本の農業」授業進行スライド 07, 09, 11, 12

上記導入部の提示の後、『経済学批判』における理論的な枠組みを踏まえた授業構成を行ったことを提示した。この提示のすぐ後に、学生たちは『経済学批判』における「生産的活動は、実現の出発点であり、し

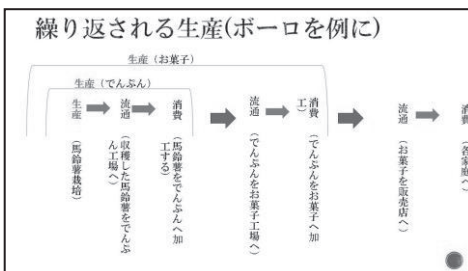
たがってまたその優勢な契機であり、全過程がふたたびそこにはいつていく行為である」との部分の引用を踏まえて、十勝における馬鈴薯生産にかんする再現性について具体的に述べた¹⁰⁾。

上に述べた「全過程」を今回の授業テーマである馬鈴薯に当てはめるならば、生産された馬鈴薯が流通を経て加工されでんぷんとして消費された後、さらに生産物としてのでんぷんが流通を経て加工され菓子としてのボーロという形で消費された後、生産物としてのボーロが販売店への流通を経て各家庭において消費されるという一連の経過に対応するものと考えられる。これら一連の理論的枠組みに関して学生たちは、以下のようなスライドを作成して授業を行った。

マルクスの『経済学批判』とともに、
ジャガイモが製品なるまでの工程を
『生産』・『流通』・『消費』の観点から考える。



カール・ハインリヒ・マルクス
プロイセン王国（現ドイツ）
出身のイギリスを中心に活動した
哲学者、思想家、経済学者、
革命家
経済学批判(1859年)
資本論(1巻1867年、2巻1885年、3巻1894年)



繰り返される生産

「生産的活動は、実現の出発点であり、したがってまたその優秀な契機であり、全過程が再びそこに入ってくる行為である。」

(c f : 経済学批判 序説 P284 より)

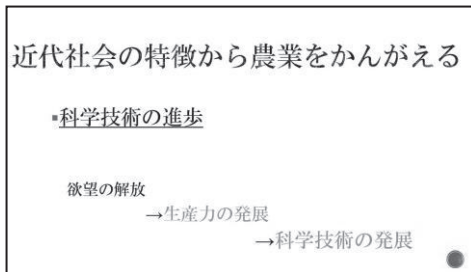
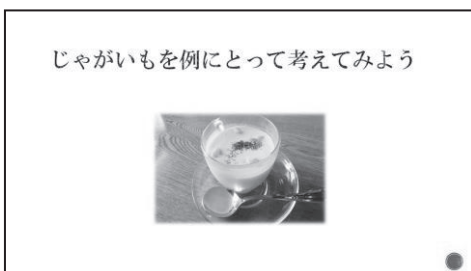


図3 「十勝の馬鈴薯と日本の農業」授業進行スライド 14, 15, 16, 17

上図のスライドを見てもらうことにより、農産物としての馬鈴薯の生産がでんぷんの生産、さらには菓子の生産へと移り変わっていく様子をしめすことが可能となった。

『経済学批判』においては、流通は「特殊性」として、消費は「個別性」として現れると記されていた。十勝地域における流通はかつての十勝鉄道から、道東自動車道や帯広・広尾自動車道といった高速道路網及び自動車道路網という「特殊性」として現れた。また、消費に関しては大小さまざまな菓子店という「個別性」として現れた。

授業においてさらに、「生産力の発展」と科学技術の発展とのかかわりについての学生による考察がしめされた。この考察を踏まえて、イモ類を利用した発電について研究を深めている研究者のビデオが披露された後、「じゃがいもには様々な可能性がある！」との結論の提示により授業の結びとした。



高山農場を経営している高山柳大がじゃがいもを使用した料理をたくさん食べたい！！【欲望】

↓ どうすればよいか...

じゃがいもをたくさん生産すればいいんだ！！

↓ どうすればよいか...

大型のトラクターを使い病気に強いじゃがいもを作ろう！！【生産力の発展】

↓ どうすればよいか...

品種改良し病気に強いものを！！
大型トラクターの製造！！

科学技術の発展

鈴木 高広

近畿大学生物理工学部教授
東京理科大学客員教授
農学博士

じゃがいもには様々な可能性がある！

図4 「十勝の馬鈴薯と日本の農業」授業進行スライド 18, 19, 22, 24

4. 実践の成果と今後の課題

以上本稿では、『経済学批判』における理論的な枠組みを踏まえた授業づくりの内容と方法について、考察と実践の概要を述べた。授業において理論的な枠組みの構築を試みることに意義について、学生たちは文献の困難さに戸惑いつつも彼らなりの理解のもとに授業づくりを行った。この授業づくりの結果として推察されることは、指導する大学教員が程よい援助を行うことによって、大学生に対して学問研究の成果を踏まえ

た「地域教材」づくりを行わせることが可能となるということである。本稿に示した実践の概要からも、学生らの作成したスライドには『経済学批判』における理論的な枠組みが反映されていた。

残念に思われることは、授業の成否の詳細にかんして、参加した高校生たちからの感想をいただくことができなかった点にある。周辺の同僚教員の評価や、参加高校生からは好意的な意見表明はいくつかはなされてはいたが、これら意見が授業の進行過程の中に位置づけられなければ評価は困難であり、授業改善に向けての方向性を把握することは難しい。

しかし、生産という概念を地域経済把握のための足場とすることの有効性は、他の授業実践によって確かめることは可能と思われる。今後の勉強のために参加させていた他の学生からは、他の生産物にも同じ枠組みを用いることが可能ではとの意見表明がなされた。このような学生の興味関心を踏まえて更なる授業づくりを行うことは、今回の実践の成否を検討していくための追試となりうると思われる。

註

- 1) 経済同友会教育問題委員会『18歳までに社会人としての基礎を学ぶー大切な将来世代の育成に向けて中等教育, 大学への期待と企業がなすべきことー』(2009. 2. 2) pp. 12-13
- 2) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 総則編』(2017. 7) p. 4
- 3) 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(『用語集』2012. 8. 28) p. 37
- 4) 荒井眞一「古典経済学における理論的枠組みに基づいた地域研究の教材化」(『札幌大谷大学紀要 第46号』2016) pp. 71-76
- 5) 2012年度オープンキャンパスにおける模擬授業(全4回)の概要は、『地域を学びの場とした教職実践のあゆみ』第1号という小冊子(札幌大谷大学社会学部地域社会学科発行, 2013, 編集は筆者の手による)としてまとめられている。
- 6) マルクス著 杉本俊朗訳「〔経済学批判への〕序説」(『経済学批判』大

- 月書店 1953) p. 271
7) 前掲書 6) p. 291
8) 前掲書 6) p. 277
9) 前掲書 6) p. 292
10) 前掲書 6) p. 284

引用文献

- ・経済同友会教育問題委員会『18歳までに社会人としての基礎を学ぶ一大切な将来世代の育成に向けて中等教育, 大学への期待と企業がなすべきこと一』(2009. 2. 2)
- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説 総則編』(2017. 7)
- ・中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」(『用語集』2012. 8. 28)
- ・荒井眞一「古典経済学における理論的枠組みに基づいた地域研究の教材化」(『札幌大谷大学紀要 第46号』2016)
- ・マルクス著 杉本俊朗訳「[経済学批判への] 序説」(『経済学批判』大月書店 1953)

(あらい しんいち, 札幌大谷大学社会学部准教授)

(ひらおか よしゆき, 札幌大谷大学社会学部教授)

(かとう ひろあき, 北海道札幌平岸高等学校教諭)